

## 第4回 沖縄科学技術大学院大学学園の今後の諸課題に関する検討会 議事要旨

1. 日時：平成27年2月6日（金）15:00～17:00
2. 場所：内閣府本府庁舎3階特別会議室
3. 出席者
  - (1) 構成員  
平澤座長、榎座長代理、相澤委員、伊集院委員、岡崎委員、門永委員、長岡委員、西澤委員、野路委員
  - (2) 政府側  
石原沖縄振興局長、岡本総務課長、橋本事業振興室長、中嶋企画官、新田専門官、原専門官、田原専門官、矢島専門職、小林係長

### 4. 議事要旨

#### 議事1 平成27年度予算案について

事務局より資料に基づいて説明がされた後、委員から以下のような主な意見があった。

- 27年度に予定されているピアレビューについては、定性的にしか評価できない部分と数量で評価できる部分に分けてそれぞれのセットを考えるべきである。
- ピアレビューにおいて、研究について個別に見るのであるから、その結果は学長にもフィードバックし、有効に活用されたい。
- 現在の5年毎の研究評価の仕組みは上手く機能していると思う。長く在籍しているPIはすでにその評価を受けているので、その後着任されたPIが具体的な対象になっていると思われる。
- OISTの在り方については準備段階から議論されてきた。一つは、科学技術にあまり馴染みのない沖縄に科学技術マインドを植え付け、一方で「国際化」された地域であることをさらに一歩進め、「国際ビジネス」を展開する際のモデルになること。これは着実に実行されつつある。もう一つは、沖縄の自立的発展に資する形になっているか。過去に理事会等で議論されたのは、都道府県別で一人当たりGDPが中位になるという姿。しかし、これはOISTだけでなく沖縄全体で取り組むべき問題で、すぐに結果を求めることは困難。結果に向かってどれくらいの取組をしているかを年々チェックするという構図になろう。

#### 議事2 平成27年度学園事業計画案について

事務局より資料に基づいて説明がされた後、委員から以下のような主な意見があった。

- 知的・産業クラスターを上手く形成できるポイントは、地域がどこまでコミットするかということ。世界の事例を見ても、地域がどこまで頑張るか、それにどこまで大学が関与するかということであって、決して大学がリーダーシップをとれるよう

なものでないことは定説になりつつある。ピアレビューで研究レベルを評価する際は、この点が上手くいかないが故に評価を下げるようなことのないように留意する必要がある。

- クラスターは一朝一夕ではできない。世界的レベルで研究している OIST と地域がどう結びつくか、どのレベルにあるか、どういう連携ができるかを検証してからでないと評価は難しいかと思う。
- OIST の内部でクラスター形成に向けてどのような取組をするか、沖縄県や内閣府とクラスターをどう形成するか。これらを分けて考える必要がある。
- 地域の既存の組織と結びつくと失敗する例もある。地元を一旦無視して、成果を上げた後にもう一回地元に戻るという成功のパターンもあり得る。あまり地元、地元と言わない方が良いかもしれない。
- 財務に関する事項で、外部資金の獲得強化が事業計画案に記載されており、良い傾向である。ファンドレイジングに当たっては、費用対効果も踏まえて、実効を上げてもらいたい。
- コンプライアンスについては、最近の色々な不祥事で、利益相反や輸出安全保障、リサーチ・インテグリティ等、一方的に管理する発想が強いが、下手にやると管理ばかりで研究の自由を奪いかねないので、バランスをとる必要がある。
- 研究不正への対応があまりにも強く叫ばれることによって、挑戦的な研究の意欲を削いではならない。

### 議事3 その他

事務局より資料に基づいて説明がされた後、委員から以下のような主な意見があった。

- OIST の「枠組み文書」に「本学の目的と理想」というものがある。ピアレビューの際は、OIST が目指しているものをしっかり理解した上で、それに沿って世界水準の研究やスタンスができているか、そういう評価をしていただきたい。
- 産業界との連携に関しては、産業界のアプリケーションに繋がってなくても、非常に魅力的な研究成果を出せば、自然と産業界が集まってくる。最初から地元との連携というよりも、基礎研究をベースとした成果が生まれているかを見ることが重要。
- OIST が日本の他の大学と比べてユニークというならば、何が違うかを確認した上で、そのユニークな部分を国内大学と比較しながら、そういう観点で評価してはどうか。良い部分は日本の大学も取り入れるべきである。クラスター形成については様々なやり方があり、あまり口出しをしない方が上手くいくのではないかと思う。
- ノンアカデミックなミッションを持った研究者が基礎フェーズにある程度いないと産業界にはアピールできないだろう。これは研究者のタイプを分けるということでは必ずしもなくて、一人の研究者の中に両方のテーマが混在していることもある。
- 今回の事業計画案の中には、基礎研究からこそ大きな発見が生まれる旨が書かれて

いるが、これを本当に実行することが OIST の最大の使命であろう。飛躍的な知を創造するという志が徹底しているかが重要。これは縦割りの研究領域では難しいため、壁を破るということが OIST の大きなポイント。

- 研究費については、科研費のような競争的資金獲得に追われることなく、ミッションに向かってしっかり進められる財政的基盤があり、国内の大学と比べると非常に恵まれている。研究者にはミッションを遂行するという使命があることを再認識してもらいたい。
- 1PI 当たり 2 億円というのはカリフォルニア工科大学の規模。少なくとも世界のトップがそのくらいの体制でやっているので、まずは国費 100% で支えてみようという事で制度設計された。しかし、いずれは財政的に自立する義務がある。
- OIST は国際的に見てトップレベルのものをまずは発足させてみようとしてつくられた。人件費を含めて日本の基準ではなく国際的トップレベルでという視点で準備をしてきたので、今の段階であまり日本の現状と比較して論じない方が建設的である。萎縮することなく、チャレンジしてもらおうのが今の段階で必要であろう。

(以上)